

シリーズ

# 「私の森語り」

森林・林業との関わりの中で、様々な課題に挑戦されている方の取組を紹介します。

「山林を支える日本酒文化」



杉玉の高林  
くまざき そうた  
熊崎 惣太

## ■自己紹介

東京農業大学を卒業し、東京で二十年間過ごしたのち、三十九歳で地元の岐阜県下呂市へUターンしました。

実家は屋号を「高林」と言い、代々林業を家業としていました。現在は、林業としてはかつてのような経営は成り立たなくなりましたが、父親が四十年前に始めた「杉玉づくり」を、Uターン後の生業のひとつとし、その規模を少しずつ広げています。

## ■活動内容

「杉玉(すぎだま)」とは「酒林(さかばやし)」とも言われ、酒蔵の軒先に飾られる縁起ものです。その年の良質な酒造りや商売繁盛を祈念するとともに、地域の平穏を願って、毎年



鮮やかで質の良い杉葉が大量に必要となります。

十一月〜十二月の新酒の搾りが始まる時期に、新しいものに交換することが習わしとして知られています。新しい杉玉は鮮やかな緑色が特徴で、新酒ができたことを表すサインにもなっています。

杉は常緑樹なので、年間を通じて杉玉を制作することができのですが、酒蔵では全国各地で同時期に杉玉を取り換えるので、年末年始の制作スケジュールはかなりタイトになります。ですから、この時期は体調管理に気を付けるとともに、納期に間に合わせるプレッシャーと闘う毎日が続きます。

受注量を少しセーブしたいところですが、杉玉の作り手が全国でも少ない中で注文をいただくので、今はできる限りお受けして、なんとか乗り切っている状況です。とは言うて



も、体力仕事なので、いつまでもできるわけではありません。これから先は、作り手を育てていくことにも注力していきたいです。

■メッセージ  
昨今は酒蔵だけでなく、飲食店や酒販店、日本酒のイベントなどからの引き合いも増えており、私たちが作る杉玉の六割程度が飲食店での利用です。とくに東京圏からの注文が多く、杉玉のデザイン性や趣が受け入れられていることを実感しながら、日々制作に励んでいます。

先にも書きましたが、今後も安定的に杉玉を届けるためには、若い作り手を増やさなければいけません。しかし年間を通じて雇用できるほどの売り上げがあるわけではないので、



酒蔵に飾られる直径80cm杉玉の重量は約50kg



東京で開催された日本酒イベント「クラフトサケウィーク2024」にて直径3mの杉玉モニュメントを監修・制作

■連絡先  
積極的に担い手を育てることができません。ですから、例えば「夏は農業、冬は杉玉」のように仕事と人材をシェアしあえる仕組みができないかと思案しています。また、冬の繁忙期は杉の葉が大量に必要なので、間伐などで伐採された杉の葉の買い取りも行っています。杉玉づくりも林業の一端として、少しでも業界の雇用や収益につながればと考えていますので、関心のある事業者や個人の方がいらっしゃいましたら、ぜひ連絡をいただきたいと思います。

岐阜県下呂市萩原町奥田洞463-1  
杉玉の高林 TAKABAYASHI

